

「港」の発展に「道」あり

横浜市長

林 文子



横浜は「港」とともに発展してきました。そしてその「港」の発展には、今も昔も、港とまちを結ぶ、道の整備が不可欠です。

153年前、横浜が開港した際には、西区浅間町から野毛を経て関内に至る「横浜道」が、工期わずか3か月の突貫工事で造られました。私は、野毛界隈を歩き、「野毛切通し」や「野毛坂」を通るとき、開港当時の街づくりの熱気を想像します。

その後も、日本を代表する国際港都としての横浜の発展を、道路網の整備が後押ししています。物流のコンテナ化が進み、世界の貨物が活発に動きを増す中、これまで以上に大量かつ迅速に荷物を運ぶことが求められています。今、その期待を担うのが高速横浜環状南線・北線・北西線の整備です。首都圏でのスムーズな移動を可能にする高速道路のネットワークをつくっていくことは、市民生活や環境の面からも重要です。

近年、アジア諸国の港が驚異的なペースで取扱貨物量を増やしており、相対的に日本の港はその地位を落としています。横浜港をはじめとした京浜港は2年前に「国際コンテナ戦略港湾」として国から選定を受け、積極的な投資を行うことで港の機能を高め、この状況を打開しようとしています。

いつの時代にも先進的な港には、多くの人や物が集まり活気にあふれます。横浜市歌の歌詞にもあるように、「百舟、百千船」でにぎわう港が、今後も横浜の繁栄のために不可欠です。世界に誇る国際港都・横浜の実現に向け、今後も全力を尽くし